

Anver Greif and David D. Laitin. 2004. "The Theory of Endogenous Institutional Change",
American Political Science Review. 98(4). pp.633-652

報告者：法学研究科 M2 宋財法 ソングェヒョン

概要

- ・ 1) なぜ・どうやって制度は変化するか
- ・ 2) 環境の変化に制度はどう抵抗するか
- ・ 3) どのような過程で制度は消滅するか
- ・ を説明するための新たなアプローチの紹介 ⇒ **歴史比較制度分析(HCIA)**
- ・ ゲーム理論と歴史的制度論の限界を指摘し、両者の統合の試み
- ・ **準パラメータ(quasi-parameters)¹⁾**と**制度強化(institutional reinforcement)**概念の紹介

はじめに

□既存のアプローチの限界

- ・ ゲーム理論
 - ・ 現存する制度がなぜ存続するかを説明：均衡として制度(institution-as-equilibria)
 - ・ 内生的な制度変化に対する説明の不足
 - ・ 自己執行権を前提とするゲーム理論において制度の変化は外生的起源を有する
 - ⇒ 「存続」は説明するが「変化」の説明は不足
 - ⇒ 歴史的制度論のアプローチとの統合
- ・ ゲーム理論と歴史的制度論の統合
 - ・ 「**準パラメータ**」と「**制度強化**」の概念を採用
- ・ 準パラメータ
 - ・ パラメータ：考察対象としているゲームにとって外生的パラメータの変化 → 新たな均衡の集合を考察する必要
 - ・ 変数：ゲームの中で内生的に決定
 - ・ **準パラメータ**：内生的に変化するパラメータ
 - ・ 準パラメータの例：自己執行権から生じた結果が → 現状の均衡を支える1つ以上のパラメータに影響を与え、→ それが長期的な行動を変化させる
- ・ 制度の自己強化
 - ・ 制度の変化は過去の行動パターンが自己実現性(self-enforcing)²⁾を失い、自己弱体化の過程が閾値に達すると内生的に起きる

1) 「準パラメータ」より「擬似パラメータ」の方が適切だと思うが、『比較歴史制度分析』（アブナー・グライフ著、岡崎哲二訳）の中での訳語をそのまま採用した。

2) 「self-enforcing」は「自己拘束性」や「自己恒久性」にも訳されるが、上記の訳書において「自己実現性」と訳されたため、そのまま使う。

- ・本稿の目的
 - ・制度の「安定」と「変化」を説明
 - ・制度の内生性までに考慮に入れたゲーム理論の利用
(歴史的制度論の要素を加味したゲーム理論)
 - ・準パラメータと制度強化の概念の紹介

理論的前提

□ゲーム理論

- ・制度の自己実現性に対する分析の枠組み
 - ・制度化された規範(Institutionalized norms)と共有された信条(Shared beliefs)
 - ：動機を提供
 - ・組織(Organizations)
 - ：自己強化を可能にする規範と信条の集合に影響を与える制度的要素
 - ・規則(Rules)
 - ：一定の状況下で個人の行動決定や協力を安易にさせる行動規範

□歴史的制度論

- ・制度の安定と変化を説明するために正・負のフィードバック循環に注目
- ・フィードバックによって制度は再生産され存続
 - ・負のフィードバックは制度が変わりやすくなる(流体化)時点(critical juncture)をもたらす制度の変化へ (Thelen, 1999)
 - ・正のフィードバックによって制度変化のコストが増加し(収穫逓増)、制度が安定 (Pierson, 2000)

⇒制度の安定と変化を同じ分析枠組みへ

- ・歴史的制度論とゲーム理論の統合の試み(ピアソン)の限界
 - ①パラメータの不明確さ
 - ②負のフィードバックと収穫逓増の独立
 - ③コスト以外に制度の安定をもたらす要因の欠如

内生的制度変化の新たなアプローチ

- ・繰り返しゲーム理論：取引の詳細と自己実現的な信条・行動の可能な集合の関係を特定
- ・制度はゲームのルールにおけるパラメータ(富、能力、知識、信条など)に影響

□パラメータの内生的変化の下での制度の安定性

- ・パラメータの微々たる変化の下において主体が過去のパターンを維持する3つの要因
- ・1) 知識、2) 注意、3) 整合

①知識 (Knowledge)

- ・制度化されたルールは制限された知識・情報を有する主体に均衡へ導く行動を選択できるようにする。
- ・しかし、過去の行動は未来を予測するに用いられうる最善の手段であるため、行動の変化は起こりにくい
- ・他人の行動がパラメータを変化させない限り、主体の行動は変化しない

②注意 (Attention)

- ・ある状況下において認知・理解した事は多くの注意を反映するため、過去のパターンは存続しようとする
- ・注意は希少な資源であるため、パラメータ変化は認知されにくい→行動の変化なし

③整合 (Coordination)

- ・人々は未来の均衡に対する同じ期待を有しないため、過去の自己実現的な結果へ繋がる行動ルールに依存する
- ・埋没費用、フリーライダーの問題、不確実性、情報の非対称性などによる

□準パラメータと制度強化

- ・繰り返しゲームにおけるパラメータの2つの特徴

①制度のもたらす結果によって次第に変わっていきうる事

②制度がわずかに変化しても制度の関連した行動は必ずしも変化するわけではない事
⇒準パラメータ：内生的に変化し、行動に対して直接的に条件づけしない

- ・自分自身を自己実現的に強化していく制度 ⇒ 自己強化的制度

- ・しかし自己実現的な制度は「強化」だけでなく、準パラメータの変化によって「弱体化」の方向へ向かう可能性も

⇒少しでも自己強化を繰り返さない(弱体化する)制度はいずれか替わる

- ・制度変化は断続均衡(punctuated equilibria)であるため、漸進的な変化でなく、あるショックによってもたらされる。

- ・しかし知識、注意、整合などによって緩和され、完全に断続的ではない。

制度の自己強化：二都の物語

□ジェノヴァとヴェネツィア

- ・歴史的背景

①共通点

—ジェノヴァ：697年、都市を政治的単位として確率

ヴェネツィア：1096年、コミュニオンを組織

—中央政府の権力が衰退 → 氏族・親族が社会組織における重要な単位に

—有力な氏族・親族が他の氏族・親族に意思決定権や資源を委ね、集合行為による経済的利益と交換

②相異点

—ヴェネツィア：継続的な繁栄

氏族メンバーと氏族組織との社会的結びつきが弱体化

—ジェノヴァ：経済的に衰退

氏族の社会的・政治的重要性の増大

⇒同じような初期条件、外部機会、政治構造を持つ両都市の帰結の違いは何によるか
ヴェネツィア：自己強化 ⇔ ジェノヴァ：自己弱体化

- ・ジェノヴァ
 - ↓ ・選挙で選ばれた執政官たちによる支配（主要氏族の代表）
 - ↓ ・経済の繁栄が進展(=内生的に変化する準パラメータ)し、氏族間の協力より都市
 - ↓ を政治的に支配することによる利益が大きくなる
 - ↓ →軍事競争(=準パラメータ)
 - ↓ ・外国からの脅威(=外生的なパラメータ)により相互抑止と協力へ
 - ↓ →商業的發展と構造変化
 - ↓ ・外国からの脅威が減り、再び富に関する準パラメータの増加
 - ↓ ⇒制度の破綻に結びつきうる外生的変化(外部からの脅威)の消滅がむしろ制度の
 - ↓ 弱体化を促進
 - ↓ ・ローマ帝国により氏族間の相互抑止と協力を復活させる自己実現的な制度を導入
 - ↓ ・ポDESTA(*podestà*)：地域代表者からなる委員会によって選ばれる
 - ↓ ⇒しばらくの間、氏族間の協力を促進
 - ↓ ・しかし、ポDESTAは氏族間の軍事力のバランスに基づいているため、氏族間の競
 - ↓ 争は残存
 - ・システムの崩壊

- ・ヴェネツィア
 - ↓ ・ジェノヴァとほぼ同様の初期条件
 - ↓ ・初期の氏族間の協力 → 総督の地位をめぐる氏族間の対立 → 経済の低迷
 - ↓ ・ビザンツ帝国の衰退 → 協力のインセンティブの増加
 - ↓ ・新しい自己実現的な制度の確立：裏切り者の氏族は他の全ての氏族により攻撃を
 - ↓ 受ける
 - ↓ ・裏切りに対する復讐の予想によって、氏族よりヴェネツィアに対するアイデンテ
 - ↓ イティを形成 → さらに協力を増進
 - ↓ ・総督の権限が縮小され、実質的に共和制へ移行
 - ↓ ・総督の選出は「くじ引き+大評議会」による選出になり、無作為的要素と多くの
 - ↓ 役職、短い任期により氏族間の保護—非保護ネットワークの重要性低下
 - ・時間の経過とともに、制度が自己実現的に

□ ナイジェリアとエストニア

- ・制度として亀裂構造
 - 人為的な制度として社会的亀裂を扱う
 - 社会的亀裂の構成要素：1) 信条、2) 組織、3) ルール
 - 社会に対しては内生的、社会の個人に対しては外生的

 - 社会的亀裂の指標化：エスニック・言語的分節化指標(ELF)
 - ELFは長期的に変化するものであり、準パラメータとして扱う
 - ⇒ ELFの強化・弱体化の研究

- ・応用
 - 共通点：部族・民族グループによる組織、初期状態への執着
 - ⇒ 制度強化の要因
 - 相違点：エストニア：マジョリティの高いSES
 - ナイジェリア：多元的なグループの低いSES

- ・ナイジェリア
 - ↓ ・オイル経済の下での部族間の対立
 - ↓ ・それぞれの部族が各自の連邦行政区域を有し、統治
 - ⇒部族が地理的・政治的に単位に → 亀裂構造の強化

- ・エストニア
 - ↓ ・ソ連の1つの構成国。エストニア人というアイデンティティの高さ
 - ↓ ・独立後、一元化された国として自国を規定。ロシア語話者の権利剥奪
 - ↓ ⇒ エストニア人 vs. ロシア語話者という構造の自己実現化
 - ↓ ・エストニア人の高い社会的地位によりロシア話者の同化のインセンティブが増加
 - ↓ (特に若年層のロシア語話者) ⇒ ELF の変化
 - ・エストニア人とロシア語話者の同質化 ⇒ 社会的亀裂構造の弱体化

制度強化のフォーマルな表現

□無限繰り返し囚人のジレンマゲームによる説明

- ・ゲームの設定

1 \ 2	c	d	
c	b_t, b_t	$-k, b_t + e$	c : 協力
d	$b_t + e, -k$	0, 0	d : 裏切り

- ・ 制度 : 相互が協力する(c, c)という予想
- ・ b_0 : 初期の協力による利得
- k : カモにされるとき利得
- e : 相手が協力し、自分が裏切るときの追加的な利得
- δ : 割引因子³⁾
- ・ b_t : 準パラメータ (t 期における協力による利得)

- ・ 通常の繰り返しゲームと異なる点は準パラメータの中立・正・負のフィードバックによって過去の行動が制度の強化・弱体化へ影響を与えること

①正のフィードバック

t 期において相互協力(c, c) → $b_{t+1} = b_t + \varepsilon$ → 制度の強化 → δ の範囲が拡大
 → 自己実現的かつ自己強化的

³⁾ 本稿において、割引因子に関しては詳しく述べていないが、割引因子も自己実現性やフィードバックの方向を決める重要な要因である。数式的には $\delta \geq \frac{e}{b_t + e}$ の場合に、制度は自己実現的になる。割引因子は $\delta = (0, 1)$ であり、1 の場合は e の値とは関係なく、制度は自己実現性が高まる。ただ、これが強化に結びつくためには

$$b_t + (b_t + \varepsilon) \frac{\delta}{1 + \delta} > b_t + e$$

が成立する必要がある。つまり、協力による長期的な利益が裏切りによる利得よりも大きいと期待出来る場合、協力を続け、制度は自己強化していく。上記の式の左側における $\frac{\delta}{1 + \delta}$ は $0 (\delta = 0)$ から $0.5 (\delta = 1)$ までであり、 $\delta = 0$ かつ $e > 0$ の場合は協力は維持できないため、割引因子も制度の自己強化にも関係する。

②負のフィードバック

t 期において相互協力(c, c) $\rightarrow b_{t+1} = b_t - \varepsilon$ ⁴⁾ \rightarrow 制度の弱体化 $\rightarrow \delta$ の範囲が縮小 \rightarrow 自己実現的、しかし自己強化的(X)

- ・これらの強化・弱体化はアクターが持っているフィードバックに関する情報とは独立

結論

□なぜ、どうやって自己実現的な制度によって誘発された行動が制度の長期的な存続に影響を与えるかを分析するための枠組みの提示

- ・均衡における行動が徐々に準パラメータを変化 \rightarrow 制度的均衡自体が内生的に変化
- ・準パラメータの変化は制度を環境変化に対してより薄弱または堅固化

□分析の手順

- ↓・準パラメータが固定されていると想定した上で制度の自己実現性の調べる
- ↓・その過程で含意された強化の過程を調べる
- \rightarrow ・制度の内生的な変化に対する長期間的な含意の導出

コメント

- ・個人的には難しい内容であったが、歴史と経済学の学位を両方持っている人らしい議論の進め方が印象的だった
- ・計量分析において「パラメータ」と「変数」の区別は明確であるが、このような歴史分析において両者の区別は分析者の視点によるものではないかと思う。
パラメータの変化は同じ変数を投入した場合の予測値の変化をもたらす。つまり、同じ変数が異なる帰結をもたらすという点で見れば、それがまさに「制度」でもあり、あるいは「文化」や「コンテクスト」とも言えよう。パラメータ(もしくは準パラメータ)とこれらの違いは何か。
また「変数」は内生的なものだと著者は述べたが、変数にも「内生変数」と「外生変数」がある以上、このような単純な区別で説明できるだろうか。本稿を3回くらい読んで今でもこの分析枠組みは自分には使いづらいと思った。
- ・ジェノヴァとヴェネツィアの事例の場合、外部からの脅威がなくなってから対応が異なる(ジェノヴァ：制度の弱体化/ヴェネツィア：制度の強化)が、この違いは何によってもたらされたのか
- ・割引因子(δ)の「範囲」が拡大・縮小するということは、どういう意味なのか

4) ここでは「 $b_{t+1} = b_t - \varepsilon$ 」と本文にしたがって表現したがモデルの統合のためには「 $+ \varepsilon$ 」の方が正しい。付録を参照すると全ての t において $b_{t+1} - b_t > 0$ の場合、正のフィードバックが起きる。また、最初の数式によると $b_{t+1} - b_t = \varepsilon$ であり、結論的には $\varepsilon > 0$ の時に正のフィードバックが、 $\varepsilon < 0$ の場合は負のフィードバックが起きることが分かる。